



長岡 新一さん・仁子さん(苧宿)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 佐藤
取材日：12月22日

今年、浪江に帰ります！



▲6年前と同じ、笑顔がすてきな長岡さんご夫妻

第6号（平成23年12月号）掲載時、金婚式を迎えたご夫妻が、5年後のエメラルド婚式を浪江で迎えたいとおっしゃっていました。あれから6年、浪江でエメラルド婚式がかなえられたのを願って再び伺いました。

6年前、「今、一番の思いは『浪江に帰りたい。必ず浪江に帰る。』のタイトルで掲載されました。あれから6年、まだ「必ず帰る」を果たせずにいますが、やっと今年（平成30年）12月に浪江に帰れる目途がつかしました。何年も人が住んでいなかった家は荒れるがままで、思い出っぱいの家を思い切って壊すことにしました。けれど、なかなか工事の順番が回ってこず、やっと除染、除却が済み、今は新築工事が始まるのを待っているところです。ただ、今「浪江に帰

る」が現実になり、たびたび浪江に足を運ぶようになって都度線量を測り、その日の天候などで線量に変動が見られたりすると、除染が済んだとはいえ、不安がよぎります。今年、私たちは浪江に帰りますが、子や孫はもうしばらくしてから…と正直複雑な心境でいます。

浪江では米や野菜を作り、浪江の土に生き、土の恵みを得て暮らしていましたので、こちらでも土に親しむことが、何より自分たちらしく居られると思えました。運よく、今の家の近くに畑を借りることができ、今は家族や知人の喜ぶ顔を思い浮かべながら、野菜作りに励んでいます。

妻は「武扇会」という踊りの会主をしていて、震災時は3月13日に発表会を控え、棚塩公民館で練習中でした。大きな揺れに練習を切り上げ、何とか帰路に就くも、警戒のため海に向かうパトカーとすれ違った時の警官の顔が今も思い出され、「私は生かされているとつくづく思う」と言います。今はまだ浪江に帰れませんが、体は浪江になくとも浪江の文化だけは

守っていききたい、文化こそが町の人をつなぐことができる、と県内各地のお弟子さんたちのもとを回っています。危なっかしかった高速道路の運転も、どうか慣れてきたようです。毎年開くことができるようになった交流会が、励みになっているようです。目下の懸案は、標葉神社の浦安の舞の後継者探しです。平成26年4月に明治神宮で行われた昭憲皇太后百年祭で、浪江の巫女5人が堂々と舞ってくれ、私まで誇らしかったです。この浦安の舞を何としても絶やしたくないと思うのですが、いかにせん集って練習することがままなりません。紙面をお借りして、「来たれ、浪江女子！」

6年前、「次のエメラルド婚式（結婚55周年）は浪江で迎えた」と話しましたが、かなえることはできませんでした。今年12月に新居が完成したら、2年遅れのエメラルド婚式を浪江で祝います。二人そろって健康だからこそ、迎えられる結婚記念日だと思えます。生かされた命を、日々の暮らしを、大切にしていきたいと思えます。

浪江の ころ通信

・第81号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散避難をしています。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるため一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のころ通信」が編集・発行されています。

この“浪江のころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ 再会・浪江のころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11からまもなく7年。今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のころ通信／第81号」への感想をお寄せください。

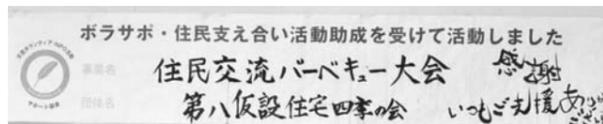
【連絡先】〒979-1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2
「浪江のころ通信」宛
FAX.0240(34)4593





▲今年3月末、その役目を終えることになった大野台第8 応急仮設住宅

◆これからの暮らしへの想い
小松さん この大野台第8 応急仮設住宅は3月で閉鎖になりましたが、それなりの付き合いとなく、人々は南相馬市八方内の団地へ移れるそうですが、本当に町民のことを考えているのでしょうか。浪江町へ400人帰ったといっても役場の関係者以外は高齢者が多いですね。私自身はこれからどうなるかわかりません。会社勤めを続けているかもしれないし、浪江町で仕事をするかもしれないし、浪江町に道の駅ができるでしよ。支援でお世話になった大



▲赤い羽根ボラサポの横断幕が今も集会所に掲示されていました。活発に活動されていた様子が伝わります。



▲インタビューの様子

イベントの景品は熊本の大鳥屋さんから年2回送っていた。この5年で約50トン。その上、何度も福島にいられているんですよ。本当にお世話になりました。だから平成28年熊本地震の時は支援物資を送りましたよ。卓上コンロとかおしめ、日用品なんかでした。水は、大きいボトルより小さいのを配った方がいいという私たちの経験から、500ミリリットルのボトルを600本送りました。コスモス農園ではみんなで野菜を作った、集会所脇の直売所で売りました。

高野さん 浪江には震災の次の年から、農業を続けています。最初の年は猪の被害があつて電気柵を建てましたが、今は10種類くらいの野菜を作っています。自分たちの食べる分だけですけども。家はぐしの修理だけだったし、浪江に帰って体が動くうちは農業を続けるつもりです。幾世橋地区は70戸。そのうち帰った家が5軒、週末に通っているのが2軒。だけど、肉や魚

鳥屋さんと一緒に全国物産館や果物の通販をやりたいと思っています。物産は全国のおいしいものをセレクトして、新商品のフルーツタルトや米粉パンも扱いたいですね。住まいは、今の職場が相馬なので、いわきの自宅には休日に帰っています。母が南相馬市の県営北原団地に居るので、平日は様子を見に行ったりしています。**佐藤さん** 南相馬市鹿島区に家を造りましたが、浪江町の家は田畑の作業があるので、昨年4月にリフォームしました。大野台に入居した頃は気持ちが大野台に不安定で、私は自治会の活動に助けられたんです。自分一人の時間をなるべく少なくして活動に没頭していれば気持ち晴れたんですよ。

山田さん 昨年10月に相馬市に家を造り、引っ越しました。「実家が相馬だから、いいよね」と言われることも多いんですけど、浪江にはお墓もあるし、17年間家族と暮らした小丸の家が私の本当の家なので、寂しいなあって思います。今は仕事をしています。何年か後には資格を取りたいと考えています。それから、来年は次男の成人式です。次男の当時大堀小6年生だった同級生やお母さん方に会いたいですね。

を買うのはまだまだ不便ですね。**小松さん** 今の浪江町には65歳以上の高齢者が7、8割。買い物は原町まで行かなきゃならないから、車を運転しない人にとって移動販売や配達の手配は必要ですよ。浪江診療所はできたけど、総合病院は無い。せめて隣の歯科と眼科に行くために、マイクローバスを巡回させるとかできないものではないかと。住んでみなきゃ分からないことが多いし、町民の帰還を促すよりも、これから何十年もかかる廃炉作業に関わっている7,000人も人々を生かした仕事づくりが求められるんじゃないかと思っています。



相馬市大野台第8 応急仮設住宅自治会

会長 **小松 康二さん**(請戸)・**佐藤 聖子さん**(立野)
副会長
会計担当 **山田 和恵さん**(小丸)・**高野 豊さん**(幾世橋)
防犯担当

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：1月13日

「相馬市大野台第8 応急仮設住宅自治会」役員さん方に聴く、これまでとこれから



▲集まってくださった自治会役員の方々。左から小松さん、佐藤さん、高野さん、山田さん。

相馬市大野台第8 応急仮設住宅は、平成23年8月に入居が始まりました。それから6年半以上が過ぎ、今年3月末にその役目を終えます。今回、その自治会役員6名のうち、4名の方々が集まってくれました。お二人ずついる副会長と会計担当のうち、お二人は残念ながら欠席されましたが、自治会設立から2代目に当たる会長、副会長、会計と防犯担当の役員さん方に約6年にわたるこれまでの活動と、皆さん方それぞれのこれからのに向けたお話をじっくりお聴きすることができました。

◆大野台第8 応急仮設住宅自治会の活動を振り返って
小松さん 大野台第8 応急仮設住宅は単身赴任者が約半分で、日中は人が少ないんですよ。私たちの役員会では、赤い羽根ボラサポの支援を受けて五つの活動グループを作りました。自治会役員がそれぞれ代表を務める四季の会、クラフト会、花の会、カラオケ、そしてコスモス農園です。仮設を出る人も次第に多くなってメンバーが少なくなりましたが、今もそれぞれで活動を継続していますよ。
※社会福祉法人中央共同募金会・赤い羽根「災害ボランティア・NPO活動サポート募金」の略。
山田さん 最初は個人の方が手芸の会として始めました。その後クラフト会になり、講師を招いて楽しくクラフトテープで作品を作り、活動をしていました。
佐藤さん 私はカラオケ。会の名称は特に付けていませんが、中心的なメンバーは7、10名で、毎週金曜日の夜6時30分から定期的に開催し、みんな楽しみにしていました。
高野さん 私は花の会。各世帯に配られたプランターの花を育てたり、水やりをしたり。植え替えの時には団地の10、20人の方々が手伝ってくれましたね。

小松さん 季節の行事をやるのが、四季の会。「なみえ復興祭」は昨年秋まで13回開催しました。大野台第8 応急仮設住宅ばかりでなく、隣の団地との交流も図りながら、借上げ住宅の人たちなども参加して毎回500、1,000人。餅つき大会もやりましたね。



▲高野さん(防犯担当)



▲佐藤さん(副会長)



▲小松さん(会長)